

第3節 試験的養殖（マロン）

水産試験場指宿内水面分場は新魚種開発の一つとして、オーストラリア南西部原産のマロン *Cherax tenuimanus* を導入、1984～1992（昭59～平4）年、同場の屋内水槽と遮光幕つき屋外水槽で地下水を使用して再生産試験を行ってきた。

マロンの生息は西オーストラリア州の南西部に限られており、現地では体重200～250gが普通で、肉質は弾力性に富み美味で、イセエビ類と同じように利用できると言われている。わが国へは、1983（昭58）年に新魚種開発協会が稚エビ6,000尾を導入して全国9カ所の民間養魚場等に配布、それぞれの所で再生産に取り組んだ^{1,2)}が、いずれも不成功に終わっている。

指宿内水面分場では、1984年5月、初めて0.7～3gの稚エビ1,020尾をオーストラリアから空輸導入、さらに3年後にも1,000尾を移入して飼育条件、再生産試験に努めてきた。この試験では、水温、水質、餌料、その他飼育条件等の研究がなされ、餌料、成長、産卵期、生殖行動、疾病その他多くの知見が得られており、導入5年目で産卵ふ化に成功、65尾の稚エビを得ている。その後、1992（平4）年まで毎年採苗されているが、1989（平元）年の1,000尾が最高となっている。

本種の飼育、種苗生産には、水質、餌料、その他飼育条件について未解明の問題が残されており、同分場では1996（平8）年から新魚種養殖技術開発試験の中でオーストラリア北東部に生息するレッドクロウとともに養殖試験を続けている。

参考文献

- 1) 小山鐵雄，他（1984～1990）：新魚種（マロン）飼育試験．昭和59～平成2年度 鹿水試事報．
- 2) 丸山為蔵，他（1987）：外国産新魚種の導入経過，水産庁研究部資源課・養殖研究所．
- 3) 小山鐵雄，柳宗悦，他（1991～1996）：新魚養殖推進事業（マロン種苗生産）平成3～8各年度 鹿水試事報．

（小松 光男）